

# ジャイナ教聖者伝の展開と人間観の変容

山 畑 倫 志

## 1. ジャイナ教と聖者伝

ジャイナ教説話文学の伝統では、教義上重要とされる人物たちを六十三偉人としてまとめ、伝記を作成することが頻繁に行われてきた。そうして作られた聖者伝は説話における枠構造の外枠としても機能し、そこに内外の説話を取り込まれ、特に北インドの西部地域において聖者伝文学が発展していった。

だが、それら聖者伝の展開過程をみていくと、12-13世紀を境に性質が大きく変わっていることがわかる。変化後の諸作品をみると、12世紀までに蓄積されてきた聖者伝文学の伝統の中には収まらない要素が多々確認される。それらの新たな要素はジャイナ教の信仰における聖者の位置づけに起きた変化を示すものと考えることができる。本論ではジャイナ教聖者伝の変化過程を確認した上で、その性質が大きく変化した要因について論じる。

## 2. 聖者伝文学の発展

ジャイナ教の聖者伝の特徴と主要な作品については Cort [1993] にまとめられている。また Jaini [1993] には偉人が増えていった過程についても考察がある。それらによれば、ジャイナ教の聖者伝説話は『カルパストラ』(*Kalpasūtra*) といった初期の祖師伝から始まり、そこに他の祖師を加えた二十四祖師の伝記、転輪聖王や他の偉人の伝記を含むようになり、六十

三偉人（Triṣaṣṭīśalākāpuruṣa）が形成されていく。プシュパダanta（Puṣpadanta）の『マハープラナーナ』（*Mahāpurāṇa*）やヘーマチャンドラ（Hemacandra）の『トリシャスティシャラーカープルシャチャリタ』（*Triṣaṣṭīśalākāpuruṣacarita*）などはそれらすべてを取り上げる典型的な聖者伝説話である。これらの説話はサンスクリット語やプラークリット諸語の一つであるマハーラーシュトラ語でも多く作成されたが、特に9世紀以降、アパブランシャ語が頻繁に使用されるようになってから、聖者伝説話は形式的にも洗練され、サンディバンダ（sandhibandha）と呼ばれる形式を用いるようになり、ジャイナ教徒によるアパブランシャ語作品の中心となる。12世紀にヘーマチャンドラがまとめたアパブランシャ語の文法や韻律も基本的にはこれらの聖者伝説話をもとに作成されている。

### 六十三偉人

六十三偉人とは二十四人の祖師、十二人の転輪聖王、九人のバラデーヴァ、九人のヴァースデーヴァ、九人のプラティヴァースデーヴァのことをいう。ほぼ伝説上の人物であるが、それぞれがジャイナ教の歴史に基づく順序のつとって並べられている。

### 祖師

祖師（Tirthamkara）は過去、現在、未来の三つの時間区分、バラタクシェートラ、ハイマヴァタクシェートラなどの十の地域にそれぞれ二十四人ずつ存在するとされている。ただ、実際にその行跡が記されるのは現在のバラタクシェートラの二十四人だけである。祖師の伝記はほぼ型が決まっており、どれも前世、親族、身体的特徴、弟子、涅槃について記述してある。だが、この二十四人のうち、第一祖師のリシャバ、第二十二祖師のネーミ、第二十三祖師のパールシュヴァ、そして最後のマハーヴィーラは他の祖師に比べてより詳細な行跡が述べられることが多い。リシャバは自身に加えて、息子のバラタとバーフバリンの説話がよく扱われる。ネーミはクリシュナの従兄弟

Tirthamkara	Cakravartin	Baladeva	Vāsudeva	Prativāsudeva
1 Rṣabha	1 Bharata			
2 Ajita	2 Sagara			
3 Sambhava				
4 Abhinandana				
5 Sumati				
6 Padmaprabha				
7 Supārśva				
8 Candraprabha				
9 Suvidhi				
10 Śitala		1 Vijaya	Tripṛṣṭha	Aśvagrīva
11 Śreyāmsa		2 Acala	Dvipṛṣṭha	Tāraka
12 Vāsupūjya		3 Dharma	Svayambhū	Madhu
13 Vimala		4 Suprabha	Puruṣottama	Madhusūdana
14 Ananta				
15 Dharma				
	3 Maghavan	5 Sudarśana	Puruṣasiṃha	Madhukriḍa
	4 Śanatkumāra			
16 Śānti	5 Śānti			
17 Kunthu	6 Kunthu			
18 Ara	7 Ara			
		6 Nandiṣeṇa	Puṇḍarika	Niśumbha
	8 Subhauma	7 Nandimitra	Datta	Bali
19 Malli		8 Rāma	Lakṣmaṇa	Rāvaṇa
20 Munisuvrata	9 Padma			
21 Nami	10 Hariṣeṇa			
	11 Jayasena			
22 Nemi		9 Balabhadra	Kṛṣṇa	Jarāsandha
	12 Brahmadatta			
23 Pārśva				
24 Mahāvira				

図1 六十三偉人一覧

(Hemacandra の *Triṣaṣṭīśalākāpuruṣacarita* に基づく)

とされ、クリシュナ説話との融合が図られる。マハーヴィーラの直前の祖師であるパールシュヴァもその説話の数が多く、内容も詳細である。

### 転輪聖王

転輪聖王 (Cakravartin) はバラタクシェートラ全土の統治者を指す。その行跡は祖師のものと同じように一定の型で示される。その型とは「前世の行いの結果、転輪聖王として生まれ、敵を打ち破り、バラタクシェートラ全

土を制圧する。そして、長期間の統治の後、苦行者となり、解脱に至る」というものである。転輪聖王の特徴として、十四の宝物（ratna）と九つの財宝（nidhi）を持つことが挙げられる<sup>(1)</sup>。十二人が数えられるが、そのうち第五、第六、第七の三人は後に祖師となるため、転輪聖王としてのみであるのは九人である（山畑 [2006]）。

### バラデーヴァ

バラデーヴァ（Baladeva）は後に述べるヴァースデーヴァ、プラティヴァースデーヴァと組になっている。例えば、第八のバラデーヴァのラーマは同じく第八代のヴァースデーヴァであるラクシュマナ、プラティヴァースデーヴァのラーヴァナと同時代に生まれたとされている。バラデーヴァの特徴は肌の色が白く、青い衣服を纏っていること、その旗印が椰子の木であること、そして四つの武具<sup>(2)</sup>（āyudha）を持っていることである。バラデーヴァはヴァースデーヴァと共にプラティヴァースデーヴァと戦い、それを打倒する。その後、ヴァースデーヴァが死ぬと、苦行者となり、涅槃に達するというのがその説話の型である。

### ヴァースデーヴァ

ヴァースデーヴァ（Vāsudeva）はナーラーヤナ（Nārāyaṇa）、ヴィシュヌ（Viṣṇu）とも呼ばれ、対応するバラデーヴァの義理の弟である。バラデーヴァ、ヴァースデーヴァ、プラティヴァースデーヴァを扱った説話の中において最も英雄的な行動をとるのがヴァースデーヴァである。対立するプラティヴァースデーヴァを殺害するのもヴァースデーヴァである。特徴としては肌の色が黒く、黄色の衣服を纏っており、胸に巻き毛を持つ。そして、鷹を旗印とし、七つの武具<sup>(3)</sup>を持っている。

ヴァースデーヴァはプラティヴァースデーヴァを殺した後、半転輪聖王（Ardhacakrin）となり、長い間、王国を治める。だが、その死後、戦争における殺生の罪によって地獄に転生する、という型で語られる。

世紀	ラーマ説話中心	クリシュナ説話中心	六十三偉人伝
1			
2			
3	Vimalasūri (Mah.)		
4			
5			
6			
7	Raviṣeṇa (Skt.)		
8		Jinasena (Skt.)	
9	Svayambhū (Apa.)	Svayambhū (Apa.)	Śīlāṅka (Mah.) Jinasena (Skt.)
10			Puṣpadanta (Apa.)
11			
12			Hemacandra (Skt.)
13			

図2 北インドの主な聖者伝説話作品 (Cort [1993: 205] をもとに作成)  
(Mah.: Mahārāṣṭrī, Skt.: Sanskrit, Apa: Apabhraṅśa)

### プラティヴァースデーヴァ

プラティヴァースデーヴァ (Prativāsudeva) は英雄ではあるが暴君として描かれる。バラタクシェートラの半分を統治する半転輪聖王であるが、バラデーヴァ、ヴァースデーヴァと敵対し、最終的には殺害される。その後、その悪行のために地獄に転生する。

### その他

上記以外にもリシャバの息子でバラタの弟であるバーフバリ、クリシュナの父ヴァースデーヴァ (Vasudeva) とその息子プラドユムナ (Pradyumna, Pajjunna)、ナラ王 (Nala)、カラカンダ (Karaṅḍa)、バヴィシユヤダッタ (Bhaviṣyadatta, Bhavisatta) などが伝記の対象となっている。

これら六十三偉人はその名前からもわかるように、おそらくジャイナ教以外の伝統から様々な人物を取り込みながら形成されていったものである。ただ図2にあるように偉人伝が形成された当初はラーマ説話が主であった。すべての偉人の伝記が含まれることを示す『マハープラナーナ』は9世紀以降増

えていく。これは実際に聖者伝説話の主役となる対象が広がっていくことを示しており、さらには12世紀にソーマプラバ（Somaprabha）が著した『クマーラパーラプラティボダ』（*Kumārāpālapratibodha*）のように実在の人物を基にした聖者伝も作成されていく。これは次に示すラーソー文学との関わりを考える上で重要である。

### 3. 形式の多様化とジャイナ教からの逸脱

それらの古典的な聖者伝に対して、12世紀後半頃から六十三偉人やその関係者の個々を取り上げた聖者伝が多く作成されていく。主題となる人物としては第一祖師リシャバの息子のバラタとバーフバリン、第二十二祖師ネーミの婚約者ラージュマティーなどが代表的である。また各地にある聖地との結びつきが強く示されるのも、この時期以降の聖者伝の特徴である。現グジャラート州にあるギルナル山はネーミと、シャトルンジャヤ山はリシャバとの関係が強調され、現ラージャスターン州に位置するアープー山は聖地自体が作品の主題となる。使用言語も地域性の薄い古典語ではなく、古グジャラート語を中心とした言語である。形式としてはアパブランシャ語による聖者伝のように一つの形式にまとまっていくのではなく、ラーソー（*rāso*）、チャルチャリー（*carcarī*）、パーラマーサー（*bārahmāsā*）といった様々な形式で書かれていく。さらに時代が下るとこれらの諸形式は非ジャイナ教徒にも用いられるようになり、多様な文学作品へと展開していく。

#### 3-1. ラーソー文学の形式

ラーソーとは12世紀以降のインド西部において発展した文学スタイルであり、詩論書や韻律書ではラーサーバンダ（*rāsābandha*）やラーサカ（*rāsaka*）等と呼ばれる。詳細は山畑 [2014, 2016] にまとめられているが、その概略を示すと、ラーサーバンダという用語はそれまでに広く使われていたサンディバンダ（*sandhibandha*）に対するものである。サンディバンダは

アパブランシャ語による聖者伝説話の多くに採用されている形式であり、『パウマチャリウ』の作者であるスヴァヤンブーによる韻律書の『スヴァヤンブーチャンダス』(*Svayambhūchandas*)を代表とした当時の詩論書に言及されている。サンディバンダは作品全体を内容上の区切りからサンディ(*sandhi*)に分け、それぞれのサンディをより細かな節にあたるカダヴァカ(*kaḍavaka*)に分けるものである。各カダヴァカはおおむね十から二十詩節からなり、その内部は起部、承部、そしてガッター(*ghattā*)と称される結部から構成されている。承部の韻律は統一されており、それが一つ一つカダヴァカを一個のまとまりとしている。

このサンディバンダに対するものとして詩論書ではラーサーバンダという形式についての記述がある。これは後代のラーソーにあたるものと想定され、アパブランシャ語による聖者伝では用いられることはないが、12世紀後半以降徐々にこの形式を用いた作品が増えていく。ラーサーバンダは歌謡や舞踏の伝統により近い形式であり、サンディバンダが形式上の制限が多く、比較的定型的なスタイルであるのに対して、ラーサーバンダは韻律の規定のみである。しかも、実際のラーソー作品は韻律書の規程に厳密に従わないことが多い。

### 3-2. ラーソー文学 (人物型)

聖者伝をラーソーの形式で表した最初期の作品が12世紀後半の『バラテーシュヴァラバーフバリラーサ』(*Bharateśvarabhūbarīśa*)である。本作品の登場人物であるバーフバリンは六十三偉人の中には含まれていないが、第一祖師リシャバの子、第一転輪聖王バラタの弟である。作者は12世紀のジャイナ教徒のシャーリバドラスーリ(*Śālibhadrasūri*)であるが、使用されている言語は古グジャラート語のため、当時の地方語の最初期の使用例としても重要な作品である。同時期に同じくジャイナ教徒のジナダッタスーリ(*Jinadattasūri*)による『ウパデーシャラサーヤナラーサ』(*Upadeśarasāyanarāsa*)が存在するが、こちらはアパブランシャ語作品であり、内容も説話

ではなく教説であるため、説話としてのラーソーにつながるものとは見なしがたい。

第一祖師であるリシャバの息子であるバラタとバーフバリンの物語は、単独の作品となるのはこれが最初であるが、ジャイナ教の説話伝承において重要な型の一つであり、多くの行伝説話の中に採用されてきた（Malvania [1977]）。この物語の型が最初に確認されるのは3世紀の『パウマチャリウ』（*Paumacariya*）であるが、そののち様々な行伝説話に挿入されている。Strohl [1990] が、9世紀にジナセーナ（Jinasena）によって書かれた『アーディプラーナ』（*Ādipurāna*）から当該説話部分を英訳している。バラタとバーフバリンが様々な戦い方で争う箇所を『バラテーシュヴァラバーフバリラーサ』から引用する。

tīhaṃ prati jāṃpai suravara sāra, dekhī evaḍu bhaḍasaṃhāra /  
 kāṃi marāvau tamhi ima jīva, paḍasiu naraki karaṃtā rīva //182  
 gaja ūtārīya baṃdhava beu, māniū vayaṇa suriṃdaha teu /  
 paisai mālākhāḍai vīra, girivara pahii sabala sarīra //183  
 vacanaḥjūjhi bhaḍa bharaḥu na jīnai, daṣṭijhūjhi hāriūṃ kuṇa a ṇai /  
 daṃḍijhujhi jhaḍa jhaṃpīya paḍai, bāhu-pāsi paḍiū taḍaphaḍai //184  
 gūḍāsamu dharāṇi-majhāri, giu bāhubali muṣṭi-prahāri /  
 bharaḥa sabala tai tīnai ghāi, kaṃṭha-samāṇiū bhūmihim jāi //185  
 kupīū bharaḥa cha khaṃḍaha dhaṇī, cakra paṭhāvai bhāi-bhaṇī /  
 pākhalī phirī su valīū jāma, kari bāhūbali dhariūṃ tāma //186  
 bolai bāhubali balavaṃta, lohakhaṃḍi taūṃ garaviū haṃta /  
 cakra-sarīsau cūnau karaūṃ, sayalahaṃ gotraḥa kuṇa saṃharaūṃ  
 //187  
 tu bharaḥesara ciṃtai ciṃti, mai puṇa lopiya bhāiya bhīti /  
 jāṇiūṃ cakra na gotrī haṇai, māma mahāri hivqa kuṇa giṇai //188  
 tu bolai bāhubali rāyau, bhāiya mani ma ma dharasi visāu /  
 tai jītaūṃ mai hāriūṃ bhāi, amha śaraṇa risaḥesara-pāya //189

そのような争いが行われているのを見て、最上の神（インドラ）が彼ら（二兄弟）に言った。いったい何のために、（これほど多くの）人びとを殺させているのか。争いを行えば、地獄へと赴くことになるであろう。インドラの言葉を聞き入れて、二兄弟は象から降りた。その勇者二人は格闘を始めた。彼らは山のように強力な身体を持つかのようであった。口争いで勇者バラタが勝利することはなく、睨み合いではどちらも譲らない。（バラタは）棒打ちでは胴体が跳ね上がって崩れ落ち、バーフバリンの足下で転げ回った。（バラタの）拳の一撃でバーフバリンは膝まで大地に埋まったが、それに対して強力なバラタは彼（バーフバリン）の一撃で首まで大地に沈められた。（バラタクシェートラの）六地域を有する王であるバラタは怒り、弟にチャクラを投げつけた。（チャクラは）四方を回った後、バーフバリンの所に戻り、彼は手でそれをつかんだ。強力なバーフバリンは言った。「ああ、お前の傲慢さは鉄片できているようだ。だが私は（お前を）チャクラのように薄切りにし、一族すべて滅ぼしてやろう」。その時、バーフバリンの心中に次のような思いがよぎった。「私は兄弟の間の節度を超えてしまっているのではないか。チャクラは同族の者を打つことはない。そんなことはわかっていた。私の節度はいまや誰が守ってくれているのか」。そこでバーフバリン王は言った。「兄よ、もう苦しみを感ずることはありません。あなたが勝利し、私は負けたのです。我々は（父である）リシャバ様の行いの守り手なのです」。

この説話は最初の転輪聖王であるバラタの偉大さと、それを超えて出家の道に称揚するバーフバリンとの対比である。これが比較的歌謡に近いラーソー（ラーサーバンダ）で書かれ、言語も古グジャラート語であったことは、戦争に強い王の賞賛とそれに対する出家者の優越についてラーソーを受容するような層に向けて発信する必要があったことが示唆される。

より時代が下ると、人物型ラーソーは非ジャイナ教徒によっても手がけられるようになり、実在の王を主人公とした『プリトヴィーラーズラーソー』

(*Pr̥thvirāj rāso*) や『ビーサルデーヴラーソー』(*Bisaldev rāso*) などの作品が書かれていく。

### 3-3. ラーソー文学（聖地型）

グジャラート州とラージャスターン州を含む地域にはジャイナ教の聖地とされる場所がいくつかあるが、そのなかでもギルナール山、シャトルンジャヤ山、アブー山は聖地として多く言及される。そのような聖地紹介文献のうち、14-15世紀に属するものについては Granoff [1999] に詳しいが、13世紀にも人物型ラーソーに引き続いて、聖地紹介のラーソーが作られている。代表的なものとして『レーヴァンタギリラーサ』(*Revantagirirāsu*)<sup>(4)</sup>と『アブーラーサ』(*Ābūrāsu*)があるが、『レーヴァンタギリラーサ』の一部を例としてあげる。レーヴァンタギリはギルナール山の別名である。1.7に名前のがるヴァストゥパーラ (*Vastupāla*) とテージャパーラ (*Tejāpāla*) はチャウルキヤ朝末期のヴァーゲーラ家が実権を握っていた13世紀前半に種々の役職を務めた商人出身の兄弟であり、寺院建設の寄進を盛んに行った人物である (Jain [1990 : 243-247], Laughlin [2011])。

#### *Revantagirirāsu* 1

paramesaratitthesaraha payapaṃkaya paṇamevi / bhaṇisu rāsu re-  
vamtagire ambikadivi sumarevi //1

gāmāgarapuravaṇagahaṇasarisaravari supaesu / devabhūmi disi peach-  
chimaha maṇaharu soraṭhadesu //2

jiṇu tahiṃ maṃḍalamaṇḍaṇau maragayamaudamahamtu / nimmalasā-  
malasiharabhare rehai giri revamtu //3

tasu siri sāmīu sāmālu sohagasuṃdarasāru / jāivanimmalakulatilau  
nivasai nemikumāru //4

tasu muhadamaṇaṇu dasadisi vi desadesamtaru saṃgha / āvai bhāvāra-  
sālamaṇaṇu hali raṃgataraṃga //5

poruyāḍakulamamaṇḍaṇau maṇḍaṇu āsārāya / vastupāla varamamti

tahiṃ tejapālu dui bhāya //6

gurajaraharadhuri dhavalaki vīradhavaladevarāji / bihu baṃdhavi  
avayāriyau sūmūdūsamamājhi //7

nāyālagacchaha maṃḍaṇau vijayaseṇassūrīrāu / uvaesihi bihu narapa-  
vare dhammi dhariu diḍhu bhāu //8

偉大なる祖師の蓮華のような御足に敬礼し、アンピカー女神の御名を唱えてレーヴァンタ山のラーサーをお歌いする。村落、鉱山、都市、森林、茂み、泉、サラスヴァティー川、豊かな地方。西の地方には神々の土地のような素晴らしいサウラーシュトラ地方がある。そこにまるでよくできたエメラルドの王冠を持っているかのような美しい土地があり、汚れなく青黒い頂により魅力を増す土地にレーヴァンタ山がある。そこに幸福で美しく彩られた青黒い顔の、汚れなき栄光のヤーダヴァ族のネーミ様がいらっしゃる。そこに十方から各地からネーミ様のお顔を見ようとすする人びとが来ている。信仰心と情熱をたたえた心を持ち、愛情の波しぶきをあげながら。ポーラヴァーダー族の誉れであるアシュヴァラージャの息子にして優れた宰相であるヴァストゥパーラとテージャパーラの二兄弟は、グルジャラの地の主であり、ドールカーに居を構えるヴィーラダヴァラ王の下、このスシャマドゥフシャマの時代に降りてきた。その二兄弟が教説によって最上の人びとの中でも（最も）強固に教えを守るようになったことをナーヤラ・ガッチャの誉れであるヴィジャヤセーナスーリが記した。

### *Revamtagirirāsu 2*

duvihi gujjaradese riurāyavihaṃḍaṇu / kumarapālu bhūpālu jīnasāsa-  
ṇamaṃḍaṇu /

teṇa saṃṭhāvio suraṭhadaṃḍāhivo / aṃbao sire sirimālakulasamḃhavo /  
pāja suvisāla ṭiṇi na ṭhiya / aṃtare dhavala puṇu parava bharāviya //1

二種類のグルジャラ地域に、敵王を打ち倒し、ジナの教えで飾られたクマーラパーラ王がいた。彼はシュリーマーラの一族に生まれたアンバダ

にスーラトの長官になるよう命じた。その大変広い階段はそれまで存在しなかった。内部ではダヴァラが溜め池に水を満たした。

ahīṇavu nemijiṇiṇḍa tiṇi bhavaṇu karāviu / nimmalu caṇḍaru biṃbe niyanāuṃ lihāviu /

thoravikkhaṃbhavāyaṃbharamāulam / laliyaputtaliyakalasaḱulaṃ-kulam /

maṃḍapu daṃḍaghaṇu tuṃgataroraṇaṃ / dhavaliya vajjihruṇaḱhanirikimkaṇighaṇaṃ /

ikārasayasahiū paṃcāsīya vacchari / nemibhuyāṇu uddhariū sājaṇi narasehari //9

彼（サージャン）によってネーミ様の新しい寺院が建てられた。汚れなく美しく、ネーミ様自身のお名前が刻まれている。強固な柱の部分は美しく、美しい彫像とたくさんの瓶で埋め尽くされており、たくさんの支柱でできた会堂には高いアーチがあり、白く輝き、内部ではたくさんの鐘が響いている。<sup>(6)</sup>（ヴィクトラム暦）1185年にネーミ様の寺院は人中の獅子たるサージャンによって建て直された。

### 3-4. 季節詩 バーラマーサーとパーク

ラーソー文学が聖者伝の形式として採用され始めたやや後に、バーラマーサーとパーク（phāgu）という形式が順次現れてくる。バーラマーサーは一年十二ヶ月それぞれの月に合わせて、恋人と離れた女性の嘆きと季節の情景を組み合わせて作るものであり、パークは特に春の月であるパールグナ（phālguna）の情景を描くジャンルである。ジャイナ教文学としては特に第二十二祖師であるネーミナータとその婚約者だったラージュルのエピソードをテーマとした『ネーミナータチャトウシュパディカー』（*Nemināthacatuṣpadikā*）や『シュリーネーミナータパーク』（*Śrīnemināthaphāgu*）がある（Vaudeville [1986]）。より後代においてバーラマーサーはテーマを変えながら、北インド各地で広く流行するが、その最初期の作品はジャイナ教徒に

よる『ネーミナータチャトウシュパディカー』である。

#### 4. 聖者伝の変容と当時の社会状況

7-12世紀に書かれた聖者伝からはラーマ説話とクリシュナ説話という影響力の強い説話を取り込まざるを得なかった状況が推察できる。ジャイナ教の中心地が北インド東部から西部へと移動するにつれ、北インド西部で信仰の強かったラーマやクリシュナなどの存在もジャイナ教の枠内で説明する必要があったものと思われる。そのため、本来はマハーヴィーラをはじめとした二十四祖師、そのなかでもリシャバ、ネーミナータ、パールシュヴァ、マハーヴィーラの四名の説話で十分であった聖典の時期とは異なり、バラタをはじめとした転輪聖王の系列やクリシュナ説話を包含するヴァースデーヴァの系列の説話が求められ、祖師伝に付随する形で増えていったのであろう。同時期のジャイナ教徒の言語使用状況も傍証となる。ジャイナ教徒はその派を問わず、著作のための言語として古聖典に用いられたマガダ語に近い言語は使用せず、北インド西部に由来するマハーラーシュトラ語やアブランシヤ語を文学作品や聖典注釈に用いた。同時にサンスクリット語の伝統を保持する階層へのアプローチのために同様の説話をサンスクリット語でも作成した。このことはそういった説話を聞く対象が実際にインド西部地域に居住する人びとであったことを示す。そのようなインド西部の「ジャイナ化」の試みの成果とも言えるのが12世紀のチャウルキヤ朝におけるジャイナ教徒の学者ヘーマチャンドラの重用とクマラーパーラ王のジャイナ教への改宗である。

だが、ジャイナ教聖者伝の中にジャイナ教の伝統にはない多くの説話を収集した結果、スヴァヤンブーの『リッタネーミチャリウ』(*Ritthanemiacariu*)のように祖師よりも下位にあたるはずの人物のエピソードが説話の大部分を占めるようになる。おそらくその不均衡の調整のために、聖典の段階では比較的単純だった祖師たちのエピソードが増大していく。『トリシャスティシャラーカープルシャチャリタ』はその典型である。だが、ヘーマチ

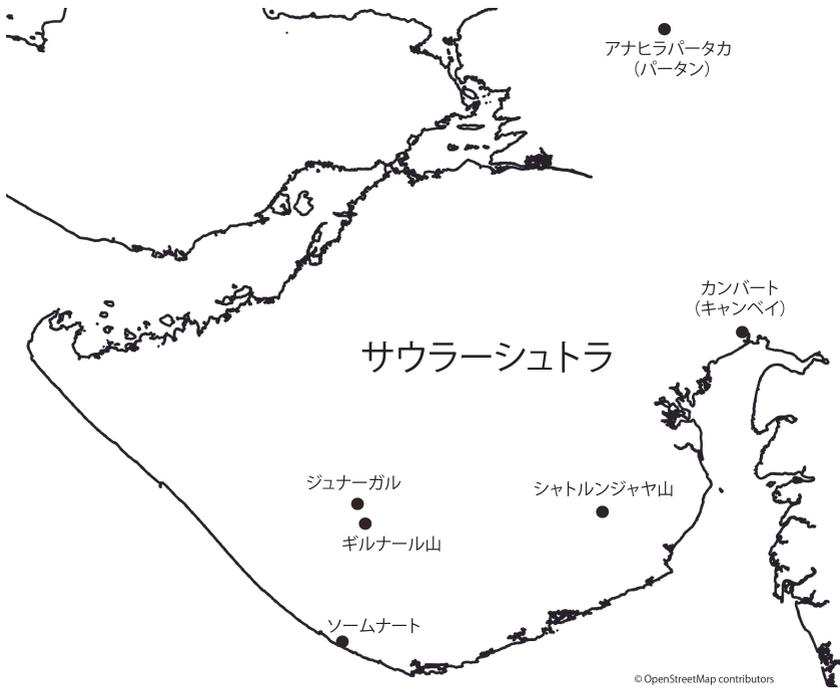


図3 グジャラート主要地の位置

ヤンドラと同時代あるいはそれ以降の聖者伝からは六十三人すべてを扱うような大部の作品は急速に減少する。それに代わって増えていくのがラーソー、バーラマーサーなどの個々の聖者を扱った規模の小さい作品群である。だがそれら新しい形式、特にラーソーは『スヴァヤンブーチャンドラス』等々に言及があるため、その存在についてはジャイナ教徒の著作者たちも以前から認識していたものと思われるが、実際の作品への適用は12世紀後半までしか遡ることはできない。そこには何らかの状況変化があったものと推察できる。

上記のような状況変化の要因を明らかにするために当時の社会状況を照らし合わせて考察する。Bürgel [1986]、Jain [1990]、三田 [2013] に基づいて当時の政治状況からこの時代をみると、アパブランシャ語のジャイナ教聖者伝が活発に作成された時期はチャウルキヤ朝がアナヒラパータカ

(Aṇahilapātaka, 現パタン) を中心にグジャラートからラージャスターン南部までを勢力下に置いていた時期と重なる。特にジャヤシンハ王 (Jayasīṃha, 在位1094-1142) はそれまで別個の勢力であったサウラーシュトラ半島部をチャウルキヤ朝に従属させる。サウラーシュトラ半島にはジャイナ教徒にとっても重要な聖地であるギルナール山やシャトルンジャヤ山があり、また貿易港として発達したソームナートも含まれている (図3参照)。

この11世紀から12世紀にかけての時期は、チャウルキヤ朝の拡大と交易路の安全確保により、ラージャスターン、グジャラート地域において商業活動が盛んになり、政治的にも商人の影響力が強くなっていく時代であった (Sheikh [2010: 50-52])。それに伴って各都市の行政において在地の自治組織と王朝が任命した組織が連携する事例が増加している (三田 [2017])。

チャウルキヤ朝の拡張と商人の台頭は、商人の本拠地である都市文化とチャウルキヤ朝で培われた文学伝統が結びついた可能性を示唆する。実際、ジャヤシンハ王の次代クマーラパーラ王 (Kumārāpāla, 在位 1145-1171) やヘーマチャンドラ (1088-1173) が活動した12世紀後半には『ウパデーシャラサーヤナラーサ』や古グジャラート語で書かれた『バラテーシュヴァラバーフバリラーサ』のようにジャイナ教の教説や聖者伝を主題としながらも、形式としてはそれまでにまとまった作品のなかったラーソーを用いた作品が作られるようになる。このような新しい形式や地方語の使用はそれまでのチャウルキヤ朝における文芸の伝統からだけでは説明しがたい。グジャラート地域で以前から使用されてはいたが、権威を得るには至っていなかった諸要素が、都市商人層の増加と王朝との結びつきの中で、文芸の世界の中に流入してきたという解釈は当時の社会状況を考慮すると十分妥当であろう。

クマーラパーラ王の後、チャウルキヤ朝は1197年と1210年にアイバク (Qutub al-dīn Aibak) にアナヒラパートカを略奪され、混乱を経て王家がそれまでのソーランキ家 (Solanki) からヴァーゲーラ家 (Vaghela) へと変わる。この時期を境にそれまで作成されていたアパブランシャ語聖者伝の作成が滞るようになる。しかし、ラーソー文学の作成はヴァーゲーラ家の時

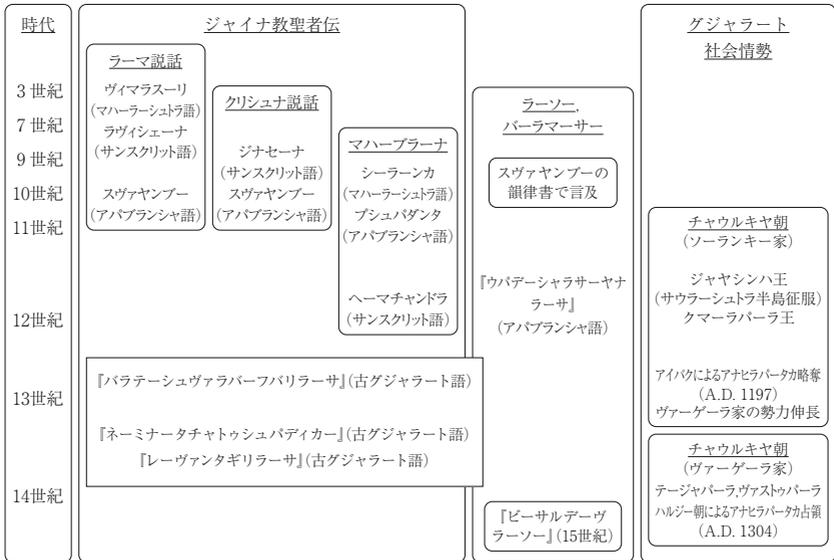


図4 文学作品と社会状況の関係

代により一層盛んになっている。特に、『レーヴァンタギリラーサ』でも言及される商人出身の宰相ヴァストゥパーラとテージヤバールの兄弟はギルナール山やアープー山といった聖地における寺院建設の寄進を多く行っており、それにまつわる聖地型ラーソーや祖師たちのラーソーが作成された。

ヴァーゲーラ家のチャウルキヤ朝もデリーのハルジー朝により王を追放され、グジャラート内陸部やカンバート周辺は1304年以降デリーのスルタンから派遣された長官が統治するようになる。同時期の14世紀頃から文学作品の趨勢も変わり、パーグの形式が増加する。そこからラーソーの形式がチャウルキヤ朝、特にヴァーゲーラ家時代に受け入れられた文学形式であることが読み取れる。

聖者伝説話の歴史的な展開と社会情勢を表した図4に示したように、文学作品の傾向の変化を政治状況の変化と突き合わせると、聖者伝文学の形式がラーソーに置き換わる時期とチャウルキヤ朝が広範な政治的影響力を失って

いく時期とがおおむね一致する。

## 5. まとめ

以上の内容をまとめると、古聖典から六十三偉人説話への変化は、ジャイナ教が北インド西部地域へ移動した際に、当該地域の言語であるマハーラーシュトラ語やシューラセーナ語、後にはアパブランシャ語を著作のための言語として採用したのと同様に、その地域ですでに受容されていたラーマ説話やクリシュナ説話をジャイナ教の偉人の体系に組み込んでいく過程でなされたものである。

それに対して、12-13世紀の変化は同時期の商業の発達により文学を受容する層が拡大していた状況が背景にある。文学の主な受容層となった商人を中心とした都市住民たちは、理解するために古典的な教養が必要なアパブランシャ語説話よりも、言語（古グジャラート語）、形式（ラーソー、バーラマーサー）、内容（夫婦の別離、聖地称揚）のそれぞれにおいてより身近な対象を求めたものと思われる。さらにその状況を推し進めたのがチャウルキヤ朝の影響力の低下である。アパブランシャ語を中心としたジャイナ教説話の伝統はヘーマチャンドラの立場が典型的であるが、王家からの庇護が大きな役割を果たしている。そのため、13世紀前半のチャウルキヤ朝の弱体化はそれまでのようなアパブランシャ語聖者伝作成の停滞を招いた。その状況下で新たに文芸の庇護者となったのはヴァーゲーラ家、あるいはヴァストゥパーラなどの商人出身のものたちである。しかし、その時期に作られたジャイナ教の文学作品はそれまでのような長大な聖者伝ではなく、より歌謡や舞踏に適したラーソーが主であった。13世紀後半のヴァーゲーラ家の時代はジャイナ教文学の観点から見ると、それまでゆるやかに進んでいた新たな形式への移行が急激に進んでおり、ジャイナ教文学史やグジャラート文学史の観点からは重要な時代であると言える。

参考文献

[一次資料]

- [*Kāvyaṁimānsā*] Dalal, C. D. 1916. *Kāvyaṁimānsā*. Baroda: Central Library.
- [*Nemināthacatuṣpadikā*] Bhayani, Harivallabh Cunilal. 1975. *Prācīna Gūṛjara Kāvya Sañcaya*. L. D. Institute. pp. 95-97.
- [*Bharateśvarabāhubalirāsa*] Jānī, Balvant. 1994. *Bharateśvara Bāhubalirāsa*. Ahmedabad: Pārśva Prakāśan.
- [*Revamtagirirāsu*] Dalal, C. D. 1920. *Prācīna Gūṛjara Kāvya Saṅgraha*. aroda: Central Library. pp. 1-7
- [*Svayambhūchanda*] Velankar, Hari. Damodar. 1962. *Svayambhūchanda*. Jodhpur: Rajasthan Oriental Research Institute.

[二次資料]

- Bürgel, Johann Christoph. 1986. *Der Islam im Spiegel zeitgenössischer Literatur der islamischen Welt*. Leiden: Brill.
- Cort, John E. 1993. "An Overview of the Jaina Purāṇas." In *Purāṇa Perennis*, ed. Wendy Doniger. New York: State University of New York Press. pp. 185-206.
- Granoff, Phyllis. 1999. "Medieval Jain Accounts of Mt. Girnar and Śatruñjaya: Visible and Invisible Sacred Realms" *Journal of the Oriental* 49 (1, 2): 143-170.
- Jain, V. K. 1990. *Trade and Traders in Western India (AD 1000-1300)*. New Delhi: Munshiram Manoharlal.
- Jaini, S. Padmanabh. 1993. "Jaina Purāṇas: A Purāṇic Counter Tradition." In *Purāṇa Perennis*, ed. Wendy Doniger. State University of New York Press. pp. 207-249.
- Kulkarni, V. M. 1990. *Story of Rāma in Jain Literature*. Ahmedabad: Saraswati Pustak Bhandar.
- Laughlin, Jack C. 2011. "Portraiture and Jain Sacred Place: The Patronage of the Ministers Vastupāla and Tejaḥpāla." In *Pilgrims, Patrons, and Place*:

- Localizing Sanctity in Asian Religions*, ed. Phyllis Granoff and Koichi Shinohara Vancouver: UBC Press.
- Malavania, Dalsukhbhai M. 1977. "The Story of Bharata and Bāhubali." *Sambodhi* 6(3, 4): 1-11.
- Paniker, K. Ayyappa. 1999. *Medieval Indian Literature*. vol. 2. New Delhi: Sahitya Akademi.
- Sheikh, Samira. 2010. *Forging a Region*. New Delhi: Oxford University Press.
- Strohl, Ralph. 1990. "The Story of Bharata and Bāhubali." In *The Clever Adulteress*, ed. Phyllis Granoff. Ontario: Mosaic Press. pp. 208-244.
- Vaudeville, Charlotte. 1986. *Bārahmāsā in Indian Literatures*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- 三田昌彦 2013「中世ユーラシア世界の中の南アジア——地政学的構造から見た帝国と交易ネットワーク」『現代インド研究』3: 27-48。
- 2017「パンチャクラとマハージャナ——中世初期ラージャスターン・グジャラートの都市行政と集会組織——」太田信宏編『前近代南アジア社会におけるまとまりとつながり』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、55-95。
- 山畑倫志 2006「ジャイナ教の行伝説話における転輪聖王」『印度学仏教学研究』54(2): 245-249。
- 2014「ジャイナ教行伝説話とラーソー文学——インド西部の文学へのジャイナ教の影響——」奥田聖應先生頌寿記念論集刊行会編『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社、460-468。
- 2016「聖者伝に拠らない初期ラーソー文献について」『印度学仏教学研究』65(1): 277-282。

## 註

- (1) 十四の宝物とは円盤 (cakra)、杖 (daṇḍa)、剣 (khaḍga)、王傘 (chatra)、盾 (carma)、宝玉 (maṇi)、カーキニー (kākiṇī、光と熱を発する宝物)、將軍 (senāpati)、侍従 (gr̥hapati)、木工職人 (vārdhaki)、宮廷僧 (purohita)、

象 (gaja)、馬 (aśva)、妻 (strī) であり、九つの財宝とは邸宅 (naisarpa)、パンドウカ米 (pāṇḍuka)、装飾品 (piṅgalaka)、宝石 (sarvaratna)、宝 (mahāpadma)、占星術 (kāla)、鉾山 (mahākāla)、武技 (māṇavaka)、技芸 (śaṅkha) である。九つの財宝のいくつかはその具体的な様相が不明瞭であるが、ここでの財宝の解釈は Kulkarni [1990 : 7] に従った。

- (2) 白衣派の伝承では弓 (dhanus)、棍棒 (gadā)、すりこぎ (musala)、鋤 (hala)、空衣派の伝承では弓の代わりに首飾り (ratnamālā) とされている。
- (3) 白衣派の伝承ではパンチャジャンヤの巻貝 (pañcajanya)、円盤 (sudarśana)、カウモーダキーの棍棒 (kaumodaki)、角製の弓 (śārṅga)、ナンダカの剣 (nandaka)、花輪 (vanamālā)、カウストウバの宝石 (kausutubha) である。この七つの武具はヒンドゥーの説話におけるクリシュナのものと同じである。空衣派の伝承では最初の二つが杖 (daṇḍa) と槍 (śakti) となる。
- (4) Paniker [1999 : 12-15] に英語への部分訳がある。
- (5) 二種類が何を指すかについては詳細不明。アナヒラパータカを含む大陸部とサウラーシュトラ地方を含む半島部、あるいはカンバートを含む沿岸部の二地域を指すとも解釈できる。
- (6) A.D. 1128/1129

キーワード ジャイナ教聖者伝、ラーソー、古グジャラート語